

私の「都市巡り」で現在連載している成都市が、短い旅であったにもかかわらず4回も続くとは当初は思いもよらなかった。まわり道をしたり脱線したりもしたが、長文になったのはやはり初めての地であった成都市の印象がとても強かったこと、そして王さんとの再会によるものと思う。見知らぬ土地に友人・知人がいることは旅に彩りを与えてくれるものである。成都市には実質3日間しか滞在しなかったわけだが、一週間以上滞在したような気分であった。



夜が明けて2月2日の朝を迎えた。天気気が気になったので外を見ると、曇り空で中国特有の霧がかかったような遠くが見通せない空模様である。四川盆地は雨が多いと聞いてきたが、3日間とも傘をさすことはなかった。

レストランで朝食をとり、コーヒーを飲みながら一日の行動予定を立てた。まず向かった所はレトロな街並みで有名とガイドブックに紹介されている「寛窄巷子」(クワンザイシャンス)である。「寛」とは、広いという意味で、「窄」は狭いという意味である。「巷子」は路地とか横丁のことであるが、イメージはわからない。

北京の「胡同」も横丁と紹介されているので、そんな感じかなと思っていた。地図でよく見れば昨夜の地下鉄の駅「天府広場」から近いが、主としてタクシーで移動するので方向や距離感は全くわからない。タクシーといえば、この街は降りるときのおつりは必ずお札なのである。硬貨がなぜ使われないのであろう。友人に聞いても分からない。中国の紙幣はあまりきれいではないので私は硬貨でおつりをもらいたいのだが……。タクシーに限らずコインのおつりはついぞなかった。

さてこの寛窄巷子であるが、タクシーから降りてそこに立てられていた案内板を見ると、要は比較的広い通り(広いと言っても4メートルくらいの道幅)と狭い通りが直線的に2本並行している。長さは500メートルはあろうか。この一帯は約三百年前の清代に造られた古い街並みが残されたものと書いてあるが、近年モダンな雰囲気^{モダン}に手を加えられ若者好みの街となった。おしゃれなカフェやレストラン、小物を売ってい

る店等が奥まで続いている。勿論車は通行禁止で道路にテーブルや椅子が置かれ、何かを飲んだり食べたりしながら人々が談笑している。

日本人のようにただ談笑するのと違って、中国人は常に何か口を動かしながら喋っている。(これは私の偏見かも) さらに歩いていくと等身大の馬の銅像があたり、緑も適度にあって眺めているだけでも楽しい場所だ。北京の胡同とは全くちがった風景であった。

そのうち湯気がもうもうと立ち込めている店の前に来た。つい中にはいってみた。メニューを見てもよくわからないので店員を呼び、指さしてあれと同じものをくれと注文した。注文したのは本当においしそうなごはん^{ごは}んと麺のセットである。ごはんはいくつかに切り分けたパイナップルの上におこわのようなごはんが載っているものだが、これが何とも言えずおいしい。ごはん^{ごは}んにパイナップルの味がしみ込んでいるが日本人の口にも合う。もうひとつの小ぶりの発泡スチロールの器には白い麺にねぎのようなものがかかっていたが、絶品でお代りをしてしまった。食するとき、麺の上の青いものが香菜かと一瞬ひるんだがそうではなかった。ホテルで朝食を食べてまだ2時間くらいしかたっていないだったので満腹となった。レトロな通りは、これから行く武侯祠のそばの「錦里古街」も有名らしいが、そこは行かなかった。

寛窄巷子からまたタクシーに乗り、長年の夢であった「武侯祠」へ。この名は、諸葛亮のおくり名である「忠武侯」に由来する。面白いのはここには彼の主人であった劉備玄德も祀られている。君主と家臣を一緒に祀った中国では珍しい祠堂だそうだ。それはいいとしても君主より家臣の名前にしたのは、諸葛亮の人氣が如何に大きいかということか。

祠堂に入っていくと、入り口に近いほうから、蜀の初代皇帝である劉備玄德が祀られている「漢昭烈廟」、その奥が「武侯祠」、一番奥の「三義廟」という順に配置されている。武侯祠内は映画などでよく見る羽扇を持った孔明が安置され、左右に彼の息子と孫の像が控えている。孫を祀るより^{おくがた}奥方を祀るべきだと思うが、それは現代人の感覚なのか。漢昭烈廟は中央に劉

備、左右に関羽と張飛が置かれているのは理解できるが……。三義廟は、「桃園の誓い」で義兄弟となった劉備、関羽、張飛を祀る廟である。この廟を正面に見て、左奥に桃園の誓いの石像の置かれている広場がある。これは、「我ら生まれた日は違えども死すときは同じ日を願わん（不求同日生、只願同日死）」という義兄弟の契りを結ぶ三国志演義の名場面を再現している。周囲には桃の木が植えられていたが、私が行ったときは冬なので葉は落ちていて想像していた光景とは少し違った。

三人の石像の前は次々と観光客が来て、お互いに写真を撮ったりして大変な人気である。私も撮ってもらおうとしたが、我先にと順番などお構いなしの観光客ばかりなのであきらめて、少し離れたところにある「惠陵」に向かった。ここは劉備と彼の二人の夫人の陵墓で、周囲180メートルの円形のなかに高さ12メートルの盛り土をし、小山のようになっている。結構大きな木々が空に向かって伸びていたが、中国の皇帝の陵墓としては珍しいのではなかろうか。

そこからまた漢昭烈廟に戻った。この建物の裏側の壁にある「出師表」を見るためだ。壁は横に長くそこに幅1メートル長さが10メートルくらいの黒い板の上にタテ書きでかかれていた。出師表とは、出陣の際臣下が君主に差し出す上奏文のことであるが、ここに掲げてあるのは魏に対し兵を挙げる諸葛亮が、劉備の息子の劉禪に差し出したもので、名文として世に名高い。

成都旅行から日本に戻ってある会合で中国の方と話す機会があり、出師表の話をする、と、諸葛亮が出した出師表は5～6通あるのだと教えてもらった。その中でここに掲げたものが一番有名ということなのか。どなたかにいつかこの名文について詳しく教えて欲しいものである。

武侯祠の観光ポイントは以上の通りであるが、まだまだ見るべきところも多い。成都に滞在の時間も限られているので最後にパンダを見に行くことにした。

市内中心部からタクシーに乗り30分余りで「成都大熊猫繁育研究基地」に着いた。パンダの保護と研究のための施設は、この基地および雅安と臥龍の三か所で2006

年に「四川省パンダ保護区群」として世界遺産に登録されたそう。ちなみに大熊猫はジャイアントパンダのことで、小熊猫はレッサーパンダである。いまではパンダと言えばジャイアントパンダを指すが、発見されるまではパンダと言えばレッサーパンダのことだったという。体が小ぶりなので〈lesser panda〉とネーミングされたい。前置きが長くなったが、入場口のすぐそばでタクシーから降りて入場券を買った。一人なぜか58元と半端な金額である。

中に入ると10人乗り程度の園内遊覧用の電気自動車が待っている。タダかと思っていると10元必要という。なんだかんだとよく金のかかることである。今の中国はどこに行っても、その辺の名もないような公園でも入場券を買わなければならないことが多い。あまり目くらまを立てるほどではないが、日本との物価水準を考えるととても高い。案内板を見ると基地内はかなり広そうなのでやむなく10元払って車に乗り込んだ。勿論歩いている人もいる。

車は右に左にカーブしながらずいぶん奥のほうまで



成都大熊猫繁育研究基地入场券



成都大熊猫繁育研究基地 <http://www.panda.org.cn/japan/about/gy1-1.asp> より

走り止まった。そこから歩いてすぐのところに大きな建物が建っていて、入るとパンダについてのいろいろな研究がなされているブースがいくつか仕切られていた。その前を通り過ぎると散策路に出た。

いるいる。どこかの動物園のように一頭とか二頭ではない。木に登っているのや歩き回っているのやら、かなりの頭数である。生まれてはじめてパンダを見たが、神様はよくこのような生き物をつくったものだと感心した。なぜ目の周りだけ黒いデザインを施したのであろう。上野動物園でも見ることができるわけであるが、やはり広い園内でササが繁っている自然に近い環境の中で見ることでよかったと思った。動物しかり古代の遺跡しかり、できることならもともとあった場所で見たいものである。ササばかり食べているせいか黄色のバナナを大きくしたような排泄物がそこそこころがっている。水浴びなどしないのかどのパンダも薄汚れている。初めて見る前まではデパートなどで売っている真っ白なぬいぐるみをイメージしていたので落差を感じた。ガイドブックに赤ちゃんパンダの抱っこは5分1000元とあったが、やめにした。

散策路が長く伸び、しかもアップダウンがあっただけなのに疲労がたまってきた。歩く元気もなくなりまた電気自動車に乗り、入場口近くに戻った。そういえば四川大地震の時、ここのパンダはどうしたのであろうと思いつつ夕暮れの中ホテルに向かった。



濃密な成都での3日間がまたたくまに過ぎ去り、4日目の朝を迎えた。いつも思うのだが楽しい時、遊んでいるときの時間はどうしても早く過ぎ去るのだろう。飛行機は現地時間9時35分発、NH0948便だ。8時には空港に着いたほうがいいので早めにチェックアウトする。フロントでチェックインした時にとられた押金(保証金)の1万円を返してもらい、「再見」と言ってホテルを後にした。空港の手続きはスムーズに終わり、待合室に入ったが人影が少ない。あとで空中小姐に聞くと搭乗者は15人だという。折角開設した路線がこれではANAも頭が痛いであろう。離陸した飛行機は偏西風にうまく乗ったのか、なんと3時間45分で成田空港に着陸した。あっという間の成都の旅であった。また是非機会をつくって訪問したい。

(この項終り)

【成都大熊猫繁育研究基地】

○目標：研究基地の目標は、成都パンダ基地が世界一流の絶滅危惧動物繁殖育成研究の中心になることです。

○簡単な紹介

成都パンダ繁殖育成研究基地（以下成都パンダ基地と略称）は、絶滅危惧野生動物に対して専門的に研究し、繁殖と育成、保護、教育をする非営利機関です。

成都パンダ基地は1987年に設立されました。設立時、保護のため捕獲した6頭のパンダの保護・育成から始まり、現在（2008年）に至るまでの間に、パンダの飼育数は83頭まで増加しました。

成都パンダ基地は、上記のような研究成果を上げつつ、パンダを初めとする絶滅危惧野生動物達が健康に成長するための保護と研究を続けています。この結果、85回に及ぶパンダの人口受精に成功し、124頭が誕生し、内88頭が無事生育しています。現在、83頭の飼育を続けながら、他のパンダ飼育機関に対する技術サポートとして専門家を派遣しています。また、各パンダ飼育機関と交流を密にして、情報を共有し、パンダの健康管理、飼育、繁殖と育成に協力するとともに、パンダ飼育の管理水準を高めています。

成都パンダ基地は敷地面積が106ヘクタールで、今後の工事の拡張によって、基地の面積は200ヘクタールまで拡大予定です。レッサー・パンダ、キンシコウ及びその他の絶滅危惧野生動物もここで繁殖及び保護活動を継続予定です。

(成都大熊猫繁育研究基地 <http://www.panda.org.cn/japan/about/gy1-1.asp> より抜粋)

